<労働者協同組合世界会議報告会>

モンドラゴンで感じたこと

中村　和男（東京都／パラマウント製靴共働社）

私の働く職場「パラマウント製靴共働社」は昨年10月に発足した「労協グループ」の一員で、企業倒産後の労働組合による自主管理を経て誕生しました。東京都足立区で現在17名で運営しています。今回のシコパ会議参加予定者が相次いで病気になり、私の代役参加が決定したのが出発の２週間前、旅券取得がギリギリ間に合った、という「ぶっつけ本番」の忙しい旅立ちでした。

会議には世界52ケ国から約400名が参加した、と報告されました。参加者の意識も幅広く、原則の討議を目的とする人達がいる一方で、経験の交流を求めて来た人達もかなりいました。アフリカや南米からの参加者の一部は招待客だったとも聞きましたが、いずれにせよ、世界の隅々で規模の大小こそあれ、労働者協同組合運動を担って頑張っている人達が大勢いるということを、目のあたりにすることができました。

さまざまな参加者がそれぞれの立場で報告を行いましたが、会議を貫いたのは「自分達の経験を丸写しに繰り返しても成功することはできない。しかし自分達の経験から得た教訓を生かして協同組合づくりに成功して欲しい。そして未来を切り拓いて行くのは、労働者協同組合の国際的連帯である。」というモンドラゴン協同組合グループのイニシアチブでした。

そのモンドラゴンは、会議が行われたバスク州の首都ビットリア市から約30分、東京でいえば五日市からさらに奥に入ったような深い山里の中にありました。山にへばりつくように存在する２万７千人もの組合員を抱える協同組合群は、夢のようにも思われ、かつ現実のものでした。

モンドラゴンの中核であるファゴールという電機メーカーの協同組合はスペイン内戦の直後の（1943年に設立され、現在6,000人が働いています。スペインでは資本主義企業の電機メーカーは全て多国籍企業によって淘汰され、ファゴールが国内に唯一残って健闘しているということを聞いて感激しました。給料は15万～30万ペセタで、この金額はスペイン全国の平均を上回るものだそうです。組合員の出資額は平均すると150万ペセタにのぼります。（１円が0.7ペセタ位）またエロスキという消費生協も規模はスペインで最大で、今後は全国展開を考慮に入れているとのことです。モンドラゴンにとって最大の悩みだったのは組合員が個人事業主とみなされ、社会保険の適用を受けられなくなったことだが、それは解決されたそうです。

見学の夜、日本の参加者が集まり感想を話し合いました。「あんな旧式の生産ラインでファゴールはＥＣ統合で激化する競争の中で生き延びていけるのだろうか。」との疑問も出ました。それに対して「働く者を大切にした、ゆったりとした生産方式にこそ成功の秘訣があり、あのスタイルできっと生き延びて行けると思う」という日本労働者協同組合連合会専務理事で今回の代表団の団長である中田さんの反論を聞き、私の頭の中の霧は一気に晴れました。急拠の派遣だったとはいえ、「代表団の付録」だった私は「帰って何を報告したらいいんだろう」と悩んでいたのです。スタート時点からファゴールは「最も遅れたメーカー」だった筈です。それが他が全滅したのに唯一生き延びて来ることができた最大の理由は「原則を守った運営」にしか無いのではないか。そしてその原則をこれからも守って行く中で危機をはね返して行くしかない。持病の痔が再発し、最低の体調でもあった私ですが、この日を境に元気を回復し、胸を張って日本に帰ることができました。

※石塚・古谷両氏の報告に関しては次号に掲載致します。